

第五章 手 p259-

- 技術；魂がこもっていない？
- 高度な技術が身につくようになる人たちにとっては、技術は表現と密接に結びつく
 - イマヌエル・カント「手は精神に開いた窓である」
- 手が高度に訓練される三種類のクラフツマンを介して考察

知的な手／手はどのようにして人間的になったのか――握ることと触ること 260 頁-

- 「知的な手 intelligent hand」のイメージ（チャールズ・ベル）
 - 創造主たる神に由来する完璧にデザインされた「目的に適った」肢 limb
 - 脳は視覚によるイメージよりも手の触覚から信頼に足る情報を得る
- 手の「使用」によって脳は大きくなった→道具を作れるようになり、文化を創るに至った（ダーウィン）
 - 進化論者：「完璧なる手ではなく、手の運動を引き起こし、協調させ、制御する神経のメカニズム全体」が、現生人類の発達を可能にした
 - 動物（チンパンジー）との違い；親指と他の指との身体的対向
- 手の構造的変化がもたらした独特の身体的経験；「ものを握る grip」 261 頁-
- 自発的な行為
- 手を加えることの可能化；文化的進化
 - 小さなものをつまんだり／ものを掌に載せ親指と他の指の間で突いたり揉んだり転がしたり／手をカップ状にして握ることができる
 - ；片方の手で物体を持ちながら、もう片方の手でその物体に細工をすることが可能に
 - 自分が持っているものの性質について考え始める。“get a grip” “come to grips with an issue”
- 手を放すという行為
 - 恐怖や執着を振り払う人間の能力の根底には、身体上の、また認知上の解除 release の能力が存在
- 握る能力は、個人において発達
 - 技術を取り巻く神話（高度に技術を発達させる人間はもともと非凡な肉体を持っていない）の否定
- 触覚がもたらす感覚的情報 264 頁-
- 触覚は視覚とはことなる感覚的情報を脳にあたえているのだろうか。
- チャールズ・シェリントン：
 - 事後に反応するだけでなく先を見越して反応する感覚「能動的触覚」を探求
 - 意識的な目的を持たずに能動的で探索的な触覚に専念する感覚「局所的触覚」を指摘

- ・ 中世の金細工師の試金のやりかた→局所化された感覚的証拠から、金属の性質を顧みて判断する (ex:たこ)
- 視覚-脳-手の神経網により、触れ、握り、見る行為は協力して働くようになる。

抱握——何かを掴むこと 266 頁-

- 「抱握」：身体が感覚的データを得る前に予測し行為する、そうした動作の専門的名称。
- ・ 身体的行動だけではなく、知的理解に対しても、ある特定の枠組みを与える。
 - すべての情報が手元に揃うまで考えるのを待つということなどせず、意味を予想する。
 - トマス・ホプズによるキャベンディッシュ家の子どもたちの例 (267 頁-)
- ・ その場の現実を規定する。
 - 指揮者の例；音に一瞬先んじて指示の手ぶりを行う
- ✓ レイモンド・タリスによる抱握の現象の説明
 - 【予期】例えばグラスに伸ばす手の形や姿勢→【接触】触れることを介して脳が感覚的データを得る→【言語的認識】掴んでいるものを名づける→【省察】最後に行ったことを振り返る
 - 「価値」高度に技術化した手によって価値が増進されるのではないか (セネット)

手の美德／指先で——嘘偽りのなさ 269 頁-

- スズキ・メソッド
- ・ 弦楽器を弾くとき、正確な音の高低を生み出すために指板のどこに指を置くべきか
- ・ 発音法
 - ・ 指板に薄いビニールのテープを貼り付ける→指でなぞりながら完璧に正しい音で音を出す。
 - ・ 美しい音色を出すための複雑な問題には注目せず、スタート時から音色の美しさを重視
 - 簡単に子どもは「キラキラ星」の名演奏家に
 - 指先は指板を知らないで、テープがはがされた途端に音程の外れた音が出るようになる。
 - 「偽りの正確さ」
 - 「文法チェック機能」も、利用者に、どうしてある文法構造が他の文法構造に比べて好ましいのかについて、何の洞察も与えてくれない
 - ・ スズキ・メソッド；子どもが音楽を奏でることに喜びを感じるようになったら、すぐにテープを剥ぎ取るように勧める。
 - 真実は指先にある
 - ・ 音楽家はさまざまなやり方で弦に触れてさまざまな音色を聞き分け、自分が望む音色を反復し再生するためのやり方を模索する；結果から原因へ遡って推論する
 - ・ 正確に音をとるための問題が新たに出現するたびに、彼はそれまでに到達した解決策を考え直さざるを得ない；試行錯誤を必須とする
- ・ 試行錯誤の動機づけ——「移行対象」へ 273 頁-
 - ・ すべての人間的発達に根本的なある経験；母親からの分離 (ウィニコットとボウルビー)
 - 母親とのつながりの喪失は不安と悲しみの感情を引き起こす反面、豊かな出来事
 - 母親以外の人間やモノ；「移行対象」に注ぎ込むようになるエネルギーとは？？

- 真に好奇心を誘い得る事柄
- 不確かな、もしくは不安定な経験
- 音楽家における「移行対象」 275 頁-
 - 達成すべき客観的指標；正しい音程で演奏すること
 - 正確さを信じる→技術的改善を促す
 - 移行対象に対する好奇心が進化して、その対象がどうあるべきかという定義になる
- 高度な専門的技術は、ほんものについての確固たる客観的標準を持つ人々によってのみ実現される
- 技術の正確さへの信念と、その探求が表現を生む
 - 幸福な偶然を理解したり、より幸福なものを選定したりするために尺度をもっていなければならない。
 - 現実に聞こえる音が真実の瞬間となる；間違いがはっきりと判る瞬間
 - 最終的に間違いを正すためには、すすんで間違いを犯し、間違っ音色を出さなければならない
 - 何かを出現させる行為における多様性によって、同一性と差異について探求できるようになり、練習は単なる指先の反復ではなく、物語になる。
- テクニックは、正しいやり方で事を行うことと、間違いを通して実験を行おうとする意欲との弁証法によって向上する。
- 「目的に適った」手順もしくは道具の使用／目的適合性 278 頁-
 - 目的適合性：あらかじめ定められた目的に役立たない手順をすべて排除しようとする
 - 出発点ではなく、達成されるもの／結果として得られるもの
 - その目的に到達するために、仕事の過程では、一時的には混乱した状況——間違っ動き、誤ったスタート、行き詰まり——に陥らなければならない

二本の親指——協調、協力から 279 頁-

- クラフツマンの不変の美德；作業場の社会的イメージ；協調しながら働く労働者たち
- 身体的協調の経験と社会的協力について考えていく
 - 二本の手がどのように協調し、かつ協力し合うのか
 - ✓ 手の指は力も柔軟性も不揃い
 - ✓ それらの差異は手の技術が高度なレベルに達すると補正される
 - 友愛的な協力は、技術を対等に分かち持つことに依存するものではない。
- ピアノの演奏を例として
- 指の独立と同様、手の独立が大きな問題に。
 - デヴィッド・サドナウ@アメリカのピアニストにして哲学者
 - ジャズ・ピアノの、手の連携の問題の難しさに直面二本の手を別々にうまく働かそうとするのではなく、すべての指を真のパートナーとして用いることで解決策を見出す。
- 「補正」の生物学的基礎 283 頁-
- 身体的抱握の偏向；物を取る手はどちらかに偏りがち
 - 弱い手／指を強化することだけを目標にしても、その手がより器用になることはない。

- 強い手／指は、弱い手／指を「手伝う」ために、自らの力を調整しなければならない。
- 技術の向上に関する幻想
 - ・ 各部分の働きをそれぞれ完璧にし、そのあとそれらの諸部分を寄せ集めて、部分から全体に進めば、技術的な制御力を身につけられる???
- 手の連携の場合：
 - ・ 分離し独立した左右別々の活動が結合された結果よりも、連携した作業のほうがはるかに良い結果をもたらす
- 手の技術を向上させるときに「最小の力」が果たす役割を理解することの必要性

手 – 手首 – 前腕 – 最小の力の教訓 285 頁-

- ナイフ：危険な道具、攻撃用の武器の象徴 → 自制心との関連付け
- ・ 中国においては、食事は平和的な箸で／調理の道具としてのナイフ；中華包丁
 - 肘関節を起点に前腕と手と包丁を一体化して操られる
 - 刀身が食べ物に触れた瞬間、それ以上の圧力を和らげるために前腕の筋肉は収縮
 - 前腕は包丁の柄の延長として、肘はその要として機能
 - ピアニシモを演奏するように、フォルテをうみだすように…身体的コントロールの基本線と出発点は最小の力の計算と適用
- 自制の基本線としての最小の力：「よい調理人は、手始めに、炊いた米粒を切ることを学ばなければならない」
- この技術的ルールの鍵としての「解除」 289 頁-
- ・ 力を加えて包丁を降り下ろした直後の 1000 万分の一秒間でその力を抜く能力が存在し、その能力は身体の動きそのものをよりの確なものにする。
- ・ ピアノのキーを離す能力は押すのと一体化された動作 → 指が他のキーに容易に素早く移動できるように、指の圧力はキーに触れた瞬間に解除されなければならない。
 - 大音量の音色を出すことよりも、クリアでソフトな音を出す方が難しい
- ・ 「米粒を切る」 → 密接に結合した二つの身体的規則を象徴するもの
 - 最小限必要な力という基本線確立すること
 - 解放するための方法を修得すること
 - 両者の結合の要点：運動のコントロール／人間的意味合い → 倫理的含意にも発展



西欧社会でのナイフの使用 291 頁-

- ・ ナイフが「悪」と自然発生的な暴力に対する「矯正手段」の双方を集会的意識に呼び覚ます：「文明化の過程」の始まり（エリアス）
- 自制と緩和の結合が、他者に対する寛いだ態度と自己の抑制をもたらす
- ・ 礼儀正しく食事することが、社交的技術のひとつに
 - ナイフと結びついた危険な技術の退潮
 - 寛いだ自己抑制は哲学者たちによって祝福される「自然らしさ」
- ・ エリアス：外観としての礼儀正しき、その下には、個人的な経験；恥（自己規律の真の触媒）がある
 - 自然発生的な行為（人前で鼻をかむ、放屁、放尿）の抑制

- 恥：クラフツマンが最小の力や解除を習得しようとする際の動機づけにはならない。
- ・ 恥の生理は、職人が働かせなければならない身体的運動の自由を無効化する
- ・ (むしろ) 筋肉の発達→段階的に変化をつける能力が発達し、解除の能力も高くなる
- セルフ・コントロール
 - 個人的な心痛に由来する社会的な外見
 - 身体的にも精神的にもそれ自体でゆとりを持った現実；クラフツマンの技術発達に役立つもの
- ・ 暴力の抑制 294 頁-
- ・ 「パウエル・ドクトリン」や「衝撃と畏怖」のドクトリンに対するものとしての「ソフト・パワー」
@ジョゼフ・ナイ
：熟練したクラフツマンが作業するときのやり方に近いもの
 - 「不均衡な力」；対等ならざる手が、連携して働き、弱点を補う
 - 抑制された力は、解除と連携して、身体が自制され、行為が精確になる
- 「国政術」に内在するクラフト

手と目——集中のリズム 296 頁-

- ・ 注意欠陥障害：どうしたら、子どもは一時間ばかりの持続的な集中を保つことができるのか
- ・ 知的にも感情的にもさまざまな主題に子どもたちの関心を惹きつけて、集中力を高めようとする
 - 内容を伴った取り組みが集中力を育てる、という理論に依拠
- 手の技術の発達は、この理論とは逆のことを証明
 - 長時間集中できるようになって、初めて彼あるいは彼女は感情的・知的にかかわるようになる
- 集中には内的論理が存在する
- ガラス吹き——手と目の連携 298 頁-
- ・ 哲学的ガラス吹き職人エリン・オコナーの経験
 - 失敗の経験の繰り返し
 - 「知的な手」の三和音——手、目、脳を活用するための姿勢
 - 吹き竿を握る手を緩めてコントロール；集中を長く保つ必要性
- ・ 集中力を引き延ばした二つの局面
- ・ 熱いガラスと接触しているという身体的な感覚を失い、それ自体を目的として、その物質性そのものに没入
 - 「モノとしての存在」@モーリス・メルロ＝ポンティ／「焦点感覚」マイケル・ポランニー
- 私たちはいまや何かのうちに吸収されていて、もはや自己意識はなく、しかも自らの身体的な自己に対してすらも自覚はなくなっている。私たちが取り組んでいる当の対象である、モノそのものになってしまう
- ・ よりよい仕事をするために「モノとして存在する」瞬間にとどまる必要性
 - 材料＝物質が、未だ存在しない次の発展の段階でどうなるのかを予期する必要
；抱握を恒久的な精神状態にする必要→純然たる動作の反復
- 何かを繰り返し反復する行為は、それが将来を準備するものとして組織されるとき、刺激的なものになる；リズム；テンポの確立（ただの機械的作業ではない）

- よく集中することを習得した人間は、自分が聴覚と視覚に従いながら反復している動作の回数を数えたりしない
- ある動作を繰り返してそれを上達させたい；それに伴うテンポの調節
 - 長い時間注意深く集中し、技術を改良することが可能になる
- あるテーマの内容をまだ深くは理解していない見習いたちにとっては、「集中」を習得することが第一に必要
- 練習＝実践 practice することにはそれ自体の構造があり、固有の関心が存在する
 - どのように練習時間が組織されているのか、そのやり方を検討すべき

儀式とリズム 305 頁-

- よい練習≠積極的関与 commitment??
 - 決断：ある特定の行動は行う価値があるかどうか、またある特定の人間と一緒に時間を過ごす価値があるかどうかを私たちが判断するような場合
 - 責任＝義務：ある義務や習わしに、私たち自身の必要ではなく他人の必要に服従するもの。
 - ：リズムが組織するもの
- 義務の果たし方を、何度も繰り返して習い覚える≡宗教的实践
 - 反復することで手を訓練し、予期の技術を発達させる→退屈なく、注意深くいることができる。

まとめ 306 頁-

- 頭と手の一体性という考え方を詳細に検討；アイデアの優位性に対する問いかけ
- 専門的で高度な手の技術を発達させることによってもたらされる種々の知的理解のかたち
 - ：いずれも人間の身体の基本に基づく
- 手：集中による一連の技術的発達の実現
 - 客観的な基準に基づき、触ることを介した試行錯誤の実践
 - 対等ならざるものを協調させることの学習
 - 「最小の力」と「解除」の適用の仕方の修得
 - 練習の中で発生しかつ練習を維持するリズムカルな過程で、さらに洗練・改訂される。
- それぞれの技術的な段階を統括するのは抱握

試行錯誤は闇雲にされることではなく、「真実」たる移行対象があって初めて意味を持つ。その移行対象を突き止めたい、という好奇心にも似た動機付けによって、モノと向き合う行為に没頭させられ、その反復を通じて身体の使い方（協調）や力の加減（最小の力や解除）が習得される。そのプロセスは、機械的作業ではなく、熟考ともいうべきか、「集中」そのものだ、と感じた。

客観的指標は、「音程」というある種、“本質”的な真もある一方で、相対的にならざるを得ない局面も出てくるのではないか。（例えば、料理人が目指す「真の”料理”」やガラス吹きが目指す「真の”ゴブレット”」とは？）私にとっての“本質”ということになるか。

「あるテーマの内容をまだ深くは理解していない見習いたちにとっては、「集中」を習得することが第一に必要」とあるが、客観的指標が意識される前段階で、反復／練習に没頭できるようなきっかけはどうかつかみうるかのだろうか。（漢字学習の場合は？）